



マッキンゼーでは経営コンサルタントをしていた茂木さんが、政治家の前には考古学者になりたかったという意外!?な一面。「年末も北アフリカの古代カルタゴ遺跡に行ってきました。エジプトのピラミッド、王家の谷もアンコールワットも好きですね。遺跡とか、悠久の歴史っていうものに、なんというか心が躍るところがあって、一生「文明」という土を掘っているというのはいいですよね。ロマンを求めるといふか」

そんなわけで趣味は旅行。「50歳になったんですけど、海外で訪問した国もちょうど50カ国なんです。あまり普通行く機会の少ない中東諸国にも結構行ってます。イラクのバグダッドも、イラク戦争直前の2003年3月に行ってフセイン政権のNo.2タリク・アジズ副首相と激しい交渉をしたりとか、戦争が終わった5月上旬にも行ってきました。当時、外務副大臣で、主要国の政府高官では戦後初めてのイラク入りだったと思います。日中の気温が49℃まで上がったり、停電や水不足など大変な所ですが、羊料理はなかなかでした。中東イスラム圏では羊がおいしかったり、南米アルゼンチンでは牛肉がおいしかったり（松坂牛以上!）と、それぞれの国のよさっていうのがあって、食べ物にしても文

化にしても、海外でいろいろ現地のものに触れられるっていうのは非常にいいことだと思います」

そんな茂木さんはなぜ政治家になろうと思ったのだろうか。「マッキンゼーにいたときは企業経営のアドバイザーをしていたんですね。比較的大きな企業の経営のアドバイスをしてそれなりに成功していたんですが、だんだんこの経営改革の手法を国の経営に応用できないかなって思い始めたん

**悠久の歴史に心躍らされー考古学者になりたかった**

です。そんな思いで本を書いたり、雑誌に提言を発表したり。働き盛りの経営コンサルタントでしたが、政府のいろんな委員も時間を作って引き受けました。やっているうちに、国の経営っていうのはアドバイザーじゃダメだと実感しました。やっぱり外から言っても動かないんです、官僚っていうのは。官僚を動かすためにも、国を動かすためにも、やっぱり国民の支持っていうのが必要だと。企業の場合ひとつの目的を持っているわけですよ。収益をあげようとかヒット商品を作ろうとか同じ目的意識を持っている人間の集団に対しては「こうや

ったほうがいいですよ」ってアドバイスをして、それが適切であればその方向に動いていくわけですよ。しかし国というのは必ずしも同じ方向に国民が向いているわけではないし、官僚も国益より益に傾く。だから相当しっかりしたビジョンを打ち出して政策を引っ張っていかなくちゃならない。そうなるといくらいいアイデアでも単にアドバイザーという立場でやっていてはなかなか改革は進んでいかなって、こういう思いで国政に出てきたわけです」

おすすめの本、映画を聞いてみた。

「今一番楽しみにしているのはダ・ヴィンチ・コードが映画になるんで、これは必ず見ようと。トム・ハンクスが面白い演技するんじゃないかなと思ってます。本も読んで面白かった。久しぶりに上下巻ある本を2日間で読み終えた。出張に行くときに東京駅で上巻を買ったんですよ。ほとんどを新幹線の中で読んで、帰りに本屋で下巻を買って2日間で読んでしまいましたね」

海外通で考古学者になりたかったという茂木議員の素顔が何となく伝わってくるチョイスであった。

人間・茂木としみつを知るための3つの言葉

**① 座右の銘**  
自我作古(我よりいにしえを作る)「古いやり方にとられるのではなく、よりよい方法を作ってそれを実践し認められると、それが伝統になっていく」ということ

**② 政治家でなかったら**  
考古学者。悠久の歴史っていうものに心躍らされます。

**③ おすすめの一冊**  
今はダ・ヴィンチ・コード。原書でも読むくらい興味をそそられたそう。

遊ぶ人間 **HOMO Ludens**

人間・茂木としみつ